

花月の語と柳北の花月新誌

斎藤清衛

雪月花ということばは、わが古今の文芸を通じて、ながく自然美を代表するものと考えられている。自然環境ということにも由来があるだろうが、三種の中、特に花は、春季の異名、月は秋季の別名のような扱いをうけている。ただし本論では、崎人成島柳北の編輯により、明治十年一月四日創刊され、同十七年十月二十一日、百五十五巻で廃刊されるに到った随筆物小誌の題名「花月新誌」に關聯して、花月の両面のみをまず討究することにしうと思つのである。

およそ「花」といっても、それには少くとも (一) 普通名詞としての花一般 (二) 春季の花の代表として桜花 (三) 事物の華美艶麗を示す形容語——の三義を認められる。わが上古には、その中の(二)の用法は無い。古事記(上巻)に、天津日高日子彥能邇々芸能命が、笠御前で一美女に遇われ、その名を尋ねられるとその女性に「名は神阿多都比売、亦の名は木花之佐久夜毗売と謂す」と答えたというのであるが、この「花」は咲き出ながらも散りやすい一般の花の意味をとって命名したものであることは、その命と姫との交渉を敍した

後半に姫の父なる大山津見神のことばとして、「此に今、石長比売を返して木花之佐久夜毗売を独り留め給ひつれば、天つ神の御子の御寿は、木花のなまひのみ坐しまさむ」と申されたが、その通り、天皇命等の御命はその後短命となつたものと説かれていたのである。「美しいものは長持ちせず」との諺のように、美麗の花は散りやすいという寓意であろう。播磨風土記では、雲窗の里の地名由来につき、「(伊和)大神妻、許乃波奈佐久夜比売の命、その形美麗しかりき。故、字留加と曰ふ」と出ている。「木の花咲く」の名を「姫」に附すると、美姫の通称のように用いられたのである。「はな」の語原については、「和名抄」「日本釈名」「倭訓栞」等に異説が見られるが、「端(はな)の義」とするのがもっとも穩当であろう。咲き出た花は美しいものであるから、「花々しい」「みえのよい」「はまれ」「時めく」「栄え」の意味にも通ずるに到つたものと思つ。また「木の花」ということが花卉につき洛陽人は殊更に牡丹の花を指し、成都人は海棠花を指しているように、わが國では「桜

「花」を指すようになったのは、中古時代からのことである。仁徳天皇即位を祝って王仁が詠じたという「難波津に咲くや木の花冬ももり」の一首は、古今集序・古今六帖・和漢朗詠集など多くの書に載せられ名高い歌であるが、この「木の花」は春に先駆けて咲く梅花のことだと見る説と、やはり春花の象徴である桜花であろうとする両説があるが、この歌そのものが王仁であるか否かが疑わしいことであるし、現代からの憶測は困難となっている。やはり古くは、「梅の花」「桜の花」と称え、「華麗なもの」を「花」とも別称するに到ったものであって、古今集序の中にも「今の世の中色につき人の心花になりける」と書かれている。かく抽象的観念的の用法は、「花実」と云って両者を対照して用いた例が古く、見られ、例えば、菅原道真の「新撰万葉集序」には、古歌を実、新時代の歌を花と呼び、貫之の「新撰和歌序」には、花山僧正の歌風を評し「花山僧正尤得歌体然其詞花而少実」とも評しているが、源道済案といわれる和歌十体の中には、「花体」があり、榮花物語の「初花」帖には「なほなほしき人のたとひに云ふ、時の花をかざす心はへにや」という一句もあり、勅撰和歌集の五代目のものは「詞花集」と名付けられたと云うように、技巧的の美辞麗句を、花と称した例が多く遺っているのである。

次に「桜」のことであるが、桜とは桜桃（さくらもも）の意であったものを、慣

習的に今いう「さくら」を「桜」の字で書くようになったものである。「万葉集の時代に花と云へるは梅をさして云ひ、古今集（いみ）に花と云へるは桜をさして云ふ」との説が今なお採用されているが、万葉集には桜を讃えた歌が相当多く出ている。卷八には「桜花一首併短歌」と云う題で

をとめらが かざしのために みやびとが かつらのためと
しきませる くにのほだてに さきにける さくらのはなの
にほひもあなに

反歌

こぞのはるあへりしきみにこひにてしきくらはなはむかへくら

しも

「若宮年魚麻呂誦之」とあるのみで作者不明であるが、桜花を男女共にかざしとしていた旧習がそれで知られる。その他同巻の「山部宿弥赤人歌四首」の中の一首に

あしひきのやまさくらばなひならべてかくさきたらばいたもこひ
めやも

とあり、「河辺朝臣東人歌一首」も同じく、桜花の散りやすいことを指摘したものである。なお卷八の「春相聞」の中に「藤原朝臣広嗣桜花贈（たね）娘子二歌一首」「娘子和歌一首」とあるによると、贈物として桜が用いられたことも判る。前出の「木の花」は「此花」に通

じ、最初から桜を指したものとす。宣長の考説は、例えば

木の花は、梅の濃くもうすくも紅梅、桜の花びら大きに、葉いろ濃きが、枝細く咲きたる、云々

とある「枕草子」の文からみても、そのまゝ首肯しがたいが、桜が上古以来特に観賞の花弁であったことは疑えぬところであらう。

「歌経標式」にある「春花秋実」「消行式」(八雲御抄による)にある「先花後実」もほとんどこれと同義の語と思えるが、春花の代表は桜であると看る思想がひろく普及していたものであった。古今集「春」の歌には、桜花を詠んだものが約二十余首あるけれど、明白に桜を詠んだものは總計四十余首で梅の倍数に及んでいる。「人の家にうゑたりける桜の花咲きはじめてたりけるを見てよめる貫之」
「染殿の後の御前に花瓶に桜の花をさゝせ給へるを見てよめる、前のおほきおほいまうち君」「桜の花の下しもにて年の老いぬる事を歎きてよめる、紀友則」「桜の花の盛りに久しく訪はざりける人の来りける時によみける 読人しらず」など、その春歌(上)の中の詞の書き方の三四例である。更に後撰集卷三春(下)の中には、「常に消息遣はしける女ともだちの許より桜の花のいと面白かりける枝を折りてこれその花に見くらべよとありければ、こわかきみ」とあり、また拾遺集卷一春の中には「荒れ果てて人も侍らざりける家に桜の咲き亂みだりて侍りけるを見て惠慶法師」ともあってこの類の詞書

の歌が可なり多く選ばれている。枕草子(第三段)に、「さくららの直衣に出し桂して」とあるのは、主として三月頃用いられた奥のこおくのことであつて表の色は白でそれに葡萄染の裏をつけたのが「さくらかさね」とされている。その他、桜に係わる人々の愛情は、天皇の御称号、人名、一般の地名、島名などに「桜」字を用いたものが多数に見られる。要するに中古中世に亘り、桜の花の賞玩者が増し、移植も行われて、関東では熊谷堤、近畿では吉野山と云うように各地に桜名所が出来、種類も「權桜」「源氏物語」「野分」「火桜(袖中抄)」「墨染桜」(宇治大納言物語)「八重桜」(沙石集)「普賢像桜」(虚尻)「彼岸桜」(倭訓栞)など多数に見られる。東山雙林寺の西行庵跡には西行が植えたと伝えられる西行桜があり(京羽二重)伊予松山城附近了恩寺林中の十六日桜には見物客が多く(西遊記)洛南伏見にあつた墨染桜には宗祇も見物に出かけたという(宗祇諸國物語)従つて和歌の家集では西行山家集、家隆壬二集を初め、連歌の式目には花の座が規定され、歌謡では宴曲の第一「春」(そよやあらまほしきは梅が香を、桜の花に匂はせて云々)「春野遊」(尾上の桜咲きしより、一木がもとはあやなくて、見きとかたらむ都人に、いざうちむれて御芳野や、大泊瀬志賀の山ごえ、交野かたのみの桜がり云々)「花」(春は義夫の徳ありて、名を顕せる桜桃李、此花の中にも勝まさたる紅桜・糸桜・初花桜さけるより、梢にかゝる白雲の、花

の名高きは、一石崇が住し金谷園、廬山の辺の錦繡谷、我朝は芳野山、龍田泊瀬志賀の山、奈良の都の八重桜、大内山の花桜、雲居の桜をかざすなる。〇何れも桜花を賞美し、舞曲「敦盛」の中四季の調べの条には「かさね桜に八重桜」を連らねて出し、謡曲「桜川」には、狂女がわが桜子を人買に奪われ日向から常陸桜川を尋ねてゆく筋のものなどもある。その「桜川」で、シテの狂女がワキ僧へ答える詞の一部には、

「さん候我故郷の御神をば木華開耶姫と申して、御神体は桜木にて御いり候。されば別れし我子も其の氏神なれば、桜子と名付け育てしかば、神の御名も開耶姫、尋ぬる子の名も桜子にて、又此川も桜川の、名もなつかしき花の塵をあたにもせじと思ふな」とあり、地の文の中にも

常よりも春べになれば桜川、波の花こそ、問もなく寄すらめと読みたれば、花の雪も貫之も、ふるき名のみ残る世の桜川、瀬々の白波しげゝれば、霞うながす信太の浮島の浮かめゝ水の花げに面白き河瀬かなゝ

とあって、巧に桜関係の辞句を織入れている。「花は桜木、人は武士」という類の諺の現れたのも中世から近世にかけ尚武思想の興ったことを示している。甲子夜話には、源義家が当時苗木の桜に、旗を結びつけたものが、今は六本の大木となり旗桜と通称されている

伝説なども書かれている。

近世の文人も桜を花王として推讃している。益軒「菜訓」中には「桜のほころび出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心をうごかして、えならぬながめなれ」云々とあり、賀茂翁家集の詞書には「……にほひさかゆる桜の花なん、ちどの花にすぐれにたるはうべならずや。此の花はときさへく唐国には生ひずして、空みつ大和の国のはたてに咲けるこそまことなりけれ」とあり、宣長玉勝間には「花はさくら、桜は山桜の葉あかくなりて、ほそきがまばらまじりて、花しげく咲きたるは、又たくふべき物もなく、浮世のものとも思はれず」云々と推賞しているのである。あれこれで、桜がわが国の花と考えられるに到った歴史の一端が首肯されるであろう。

次に花に对照されるのは月の美しさであるが、それは花のように例証が多くない。月の語原説も異説があるが、「日につきて空に輝く光」とするのが妥当のものであろう。少くとも古事記神話によれば、天照大御神、即、日の神について、月説命が生れ給うたことになつてゐる。漢語には、月の異名として「太陰」「玉兔」「嫦娥」「玉蟾」「銀光」「玉鏡」などと使われている。夜空に輝くものとして揚升菴外集に「月者陰宗之精也。為兔四足為蟾蜍三足」などとの伝説から来て玉兔・玉蟾とも異称したものである。わが国では古く月のことを「みぎらえをとこ」「つきひとをとこ」「かつらをと

こ」などと呼んでいるのを見ると、月を、むしろ男性として恋じたものらしい。万葉集から月を詠んだものを抜き出してみると

東の野に炎の立つ見えて反り見すれば月傾きぬ(巻二)

ぬば玉の夜はふけぬらし玉くしげ二上山に月傾きぬ(巻十七)

以上のように傾く月を詠じたものあれば、また

ぬば玉の月にむかひて時鳥鳴く音はるけし里遠みかも(巻十七)

すずの海に朝開きして漕きくれば長浜の浦は月照りにけり(同)

のあるように中天の月を詠じた歌が多い。「月押し照る」と詠出した歌が万葉集巻八その他に見られる。巻十には、寄月歌」と題し、月を譬喩化し象徴化したものが数首出ている。殊更、花を詠むように、月光を羨わしいとして賞めてはいないが、上古の人々の生活にあれこれ交渉の多かったことは否めない。

中古物語の初めは「竹取」とされている。仮空の物語であるが、赫射姫と月との関係が構想の基本をなしている。姫はかつて月宮殿のもので、慕郷の念から昇る月を仰ぎみがちである。竹取翁が「月な見給ひぞ。これを見給へば物思ひすけしきあるぞ」と留めようとするが、姫は「いかでか月を見ではあらむ」とその戒めに応じない。かくして「此の国の人にもあらず。月の都の人なり」と姫は最後に自白するのであるが、竹取物語は時代人が月に係わる神秘観を比喩的に物語った初期の一説話だと解釈されよう。月は太陽と異

り、光に盈虚の変化があり、地平水平から現れるその時刻を別にするところ、夜月の名に就いても、三日月、上弦(七八日)、望月(十五夜)十六夜月、立待月(十七夜)居待月(十八夜)廿日月、下弦(二十二三日の月)有明(下旬の月)等種々にそれが呼ばれている(「和漢名数」による)なお、後世は春花に對し秋月を詠んだものが多くなつたが、古今集の秋歌には月を特に詠んだものは以下の数首のみである。

木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋はきにけり

(詠人しらす)

しら雲に羽うちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月

(詠人しらす)

小夜中と夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月渡る見ゆ

(詠人しらす)

月見ればちぎりに物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

(大江千里)

久方の月の桂も秋はなほもみずすればや照りまさるらむ(忠岑、秋の夜の月の光しかければくらぶの山もこえぬべらなり)

(在原元方)

しかし、何れも名歌として喧伝された秀逸であり、また秋の季節に係わり哀愁を催すものとして月の描かれた歌が多いのである。源氏

物語「桐葉」の一節、

月の面白きに、夜更くるまで遊びをぞし給ふなる。いとすさまじうものしと聞し召す。(中略) 月も入りぬ。

雲の上も涙にくるゝ秋の月いかですむらむ浅茅生の宿

おほしやりつゝ、燈火をかゝげつくして起きおはします。

秋の忙びしさに月を記するのが、後の物語にも受けつがれている。

後撰和歌集の秋(中)十六首、拾遺和歌集の秋部には鑑賞としての月の歌が八首あるが、例の貫之の「延喜の御時の月次の御屏風に」と題した望月の駒の名歌などもある。後拾遺和歌集あたりから秋部の中の月の歌は二十首、さらに同集雜一には三十首も月の歌の追加が編入されている。白楽天が文友元愷を思つて詠じた「三五夜中新月色、二千里外故人心」という一首は和漢朗詠集にも選入され、後世の詩文にしばしば引用されているが、これは自家集の歌で秋部に五十一首も月の歌を詠み入れている西行の「山家集」(異本山家集による)のであることを聯想せしめるものである。その中に

修行して伊勢にまかりけるに、月のこころ都思ひ出られてよみける

都にも旅なる月のかげをこそおなじ雲井の空に見るらめ

という一首もあるが、旅中に月を仰いで初めて知られる体験であ

る。なお八月十五夜を中秋の名月として観月宴など催すのは、起原を李唐に發したものと思えるが、わが国でも年中行事の重要なものとして、月見の風習を伝えている。すでに榮花物語には「月宴」の題が見え、康保三年八月十五夜に「清涼殿のおほんまへに、皆方分ちて前裁うゑさせ給ふ」云々とあるのは、その夜に前裁合せが催されたのであつた。平家の公達には風流人が多く、平家物語卷五には「月見」の条があつて、福原新都でさえ、「名所の月を見んとて、或は源氏の大将(晝光源氏)の昔の跡を忍びつゝ、須磨より明石の浦伝ひ、淡路の漣を押渡り絵島が磯の月を見る。或は白浦・吹上・和歌の浦・住吉・難波・高砂・尾上の月の曙を眺めて帰る人もあり、旧都に残る人々は伏見・広沢の月を見る」と云うように叙している。「十訓抄」(卷三)に「二条殿より南、京極よりは東は、菅三位(晝菅原文時)の亭也。三位失せて後、年比へて月の明かき夜、さるべき人々、古き跡を忍びてかしこに集りて、月をもてあそぶ事有りけり」と出ている逸話からみても、可なり古來からの行事であつたと判る。謡曲「月見」は、徳大寺実定が八月望の夜に京都の名月を眺めようとして福原の新都から旅出することをテーマとしたものである。宴曲第一の「月」、第二の「嘉辰令月」など、秋とは限らぬが何れも国内に名高い月の名所を並べ出したものである。連歌には、月の座の式目があつたりして月を詠み入れた句は甚だ多く、そ

これは俳諧一般に対し後世に影響を及ぼしている。

ここで成島柳北主幹の「花月新詩」に論を移すが、同誌は朝野新聞社内の花月社の発行である。社名、雑誌名ともに、上述した国語「花月」にヒントを得たものであること云うまでもない。装訂はB六版の唐紙すりであり、それを和綴にし五号活字を使ったもの一冊十丁の小型誌である。明治十年頃のこととはいえ、一冊の誌代わずかに四銭であって三十冊を前払いにすれば金額一円でよいと書かれている。「花月新誌」並びに成島柳北については、ほとんどの各明治文学史が触れて居り、「国語と国文学」昭和卅年十月号のように柳北の特輯号を編した如き例もある。もっとも現代までに最上の研究手引と云えば、やはり昭和女大近代文学研究室編「近代文学研究叢書」(第一巻)の中の「成島柳北」の項のものであろう。(イ)、生涯(イ)、幼少年時代。ロ、幕臣時代。ハ、欧米周遊。ニ、記者時代。ホ、晩年と死。(ウ)、著者年表(精細を極め約四十ページに亘っている)。(四)、業績(イ、代表的著作。ロ、花月新誌。ハ、柳北の雑録)。(五)、資料年表(内容五ページに亘るもの)。(六)、遺跡、他、という内容ではほぼ概要が知られるであらう。

先ず創刊号の題言なるものをみると、
「花ト云フ何ゾ必シモ梅香桃李ヲ聞ハン、月ト云フ何ゾ必シモ眺望明魄ヲ論ゼン。夫ノ紅襟解語ノ花、青衿筆端ノ花、亦是レ絶艶

ノ人ヲ動かカスモノ有リ。才人方寸壺々ノ月、静女窈台團々ノ月、亦是レ清輝ノ人ヲ照スモノニ非ズヤ。然ラバ四時各処何クニ往クトテ花月ナラザラン。瓊筵以テ開ク可ク羽觴以テ飛バス可シ」と記されている。自ら江戸児を任じていた柳北の性格が覗われている。雑誌創刊を見るや奇稿掲載者の数は相当の多数であり名家としては、小野湖山・大槻啓沢・森春涛・大沼沈山・高昌監泉・信夫恕軒・沢田春松・前田夏燮などのような漢詩家もいた。柳北自身のも

のは、むしろ漢文崩し、仮名交りの和文が多く、かつその中に前代の非を嘲笑諷刺的に述べると云う文体のものである。一二例を掲げると、

新橋情譜二編 渥上漁史戯稿

小兼(新橋)

余初、不_レ識_二小兼之家_一向_レ在_二也。客歲花月樓之筵。友人某氏。醉後誤_レ傷_二兼之臉_一醒_レ而大悔。謀_二諸_一撫_二松子_一与_レ余。以_レ故。一_レ抵_二其_一家。兼住_レ在_二金春坊浴室前_一。屋宇清越。器具雅潔。而_レ希_レ嫌_レ皆_レ淳樸。不_レ似_二市井之人_一也。兼_レ天_レ質_レ豐_レ腴。恐_レ非_二趙家_一之種。而_レ為_二楊氏之裔_一歟。其性太_レ温厚。人目_レ為_二妓中_一君子。頃日友人雖_レ飲_レ酒。皆_レ謹_レ爾。無_レ復_レ如_二花月樓之事_一者。故_レ余不_レ見_レ兼久_レ矣。

華清池畔住_二名姝_一。好_レ就_二温湯_一溜_二玉膚_一。秋草瀟園花_レ尽_レ現。

憐^レ他^レ、舊^レ旧^レ独^レ、芳^レ躑^レ。(八十一号)

溼上漁史はもとより柳北の雅号であるが、この戯文には秋風道人の没評が附せられている。評と云えば、本誌には漢詩の投稿が殊にその数多く、一二行の程度のものであるが「柳北云」として彼自ら詩評を附している例が多い。

新秋夜坐

夢香瘦仙

手中、羅扇感^レ流^レ空。節物催^レ人^レ、暗^レ淚^レ霧。碧落^レ三^レ声^レ、過^レ雁^レ。銀河四^レ五^レ点^レ、疎^レ星。風吹^レ梧^レ葉^レ、秋^レ初^レ到。涼^レ透^レ杉^レ痕^レ、酒^レ易^レ醒。悄^レ与^レ瓶花^レ相^レ並^レ坐。一^レ般^レ、瘦^レ影^レ上^レ湘^レ屏。

柳北云。「才人多恨。一字一淚」

(八十三号)

概ねこの類である。湖山翁の「読^レ新聞^レ帛^レ中^レ米^レ國^レ前^レ大^レ統^レ領^レ留^レ贈^レ之^レ言^レ有^レ感^レ而^レ作^レ二^レ首^レ」と題したものにつき、柳北評して「今日読^レ新聞^レ紙^レ者^レ。不^レ知^レ幾^レ萬^レ人^レ也。而^レ所^レ読^レ所^レ好^レ人^レ々^レ皆^レ異。就^レ此^レ二^レ首^レ翁^レ之^レ所^レ好^レ亦^レ可^レ知^レ乎」と附言しているのは珍しく長文評の一例である。評語は概ね辛辣のものより、寧ろ穩健の調子の方が多い。

なお、掲載のものには、和歌・連歌の外に、今様や歌合の類も多数である。柳北が慶応以前に、早く英語を知る必要を感じ、三年間英学の勉強に没頭したことは名高いが、彼はある意味であまりにも多能多芸に過ぎた。何年頃学んだものか、仮名交りの和文にも長けている。「此日記は余が始めて上國に遊びし時、旅のやどりく」に

て筆のまに／＼記るしたるものなり」と起筆された「航轍日記」は数回にわたり連載されているが、その第三回目の大阪到着の条は以下のように敍きれている。

十一時兵庫の漁船に乗り浪華に向ふ風静かに波平かなり。摂河泉の山々相送り相迎へて風景殊によし。海上十里許りにて三時比天保山に着す。堤上の檣樹皆紅葉していと研なり。安治川口に到らんとする比、風波俄かに起り帆を捲くひまも無く、舟殆ど覆らんとして人々恐怖せしが、辛うじて川口に入りたり。黄昏に北新堀の肥前屋平九郎の家に着きぬ(八十四号)

かかる調子で極めて自由平淡の味を持っている。しかし、源氏物語を愛読したように、今少し古雅な文体も書いている、雅文とも評すべきで亡父の遺筆もある。

次に載するは余が王父圖書頭どのの慎徳公に陪従せし抄の記文なり。其比のさま見ん為めにと古めかしけれど茲にうつし侍る

柳北

みるめのさち

弥生の末つかた御前の花の梢どもは大かた青葉がちになりて雨の風かほりすゞしく、まだき時鳥の初音またるゝころ、海つらの見るめもゆかしきに、西の御所河崎のあたりに御馬をこゝろみ給はんとてさぶらふ人々の中にも馬にて供奉するきは、たれば月毛

かれは鹿毛栗毛などめしきだめらるゝをきゝて例ののとめあへず
(下略) (八十二号)

さすがに、源氏物語を読みその漢訳を「業史吟評」と題し、明治十二年二月から十六回に亘り連載したほど、王父も源氏物語の格調を消化していたかに憶測される。以下は「夢浮橋」漢訳の結びであり評語一節を引用する、達筆の遊戯化とも評されよう。

……天地間別、開一夢境、古今來別、設一夢局、暗夜詠、月空中架、
閣、織機繚繞。堅說、横說。至終、絶筆於夢之一字、蓋欲使、
人知人間万事、皆為一夢。而超然自得、乎夢之外也。余曾、
讀業史、亦以夢為真、以無為有、幾幾咲笑。讀幾点淚、次
第說、至是、卷撫然為問、曰、噫、嗟夢也。夢也。夢幻之世。夢
幻之身。莫往、莫來、何喜、何悲、

宿志元、將求道真、何、凶、失路、転、迷、律、
粉紅黛綠渾、空色、透破、此、関、有、幾、人、

まさに柳北独自の宇治十帖観である。この夢幻之世云々で聯想されることは、柳北自らの人生観であり処世観である。少年時代天才児と称され、わずか十八才ですでに徳川家定將軍の侍讀の役に付き、やがて徳川実録の編輯にも努力した。しかも徳川武門があまり因習保守的であつてすでに黒船渡来というに徒らに鎖國攘夷の策を尚び、過渡期の現象とはいへ、甚しく時代おくれの見界を持つことにつき

ある抵抗を抱いた。その結果、「樞官評議良^レ於^レ屈^ノ」大府威光軽^ノ、

似^レ「腰」とそれを諷刺する詩句を詠じたがために、かれは遂に退官の運にあいかつ五十日の謹慎を命ぜられた。柳北としては、当局を嘲笑せざるをえなかつたので、それが、やがて隠逸的の性格をも増長させた。但し稀有の才能は、英語を独習とするというような新進的能力を認められて慶応元年(二十九才)には歩兵頭として千石の禄を与えられ、翌三年には騎兵頭として二千石の禄を受けるに到つた。特に若輩にして明治元年に外国奉行大隅守となり、更に会計副總裁の重職を与えられたことを考えても類のない異数の人物であつた。しかも遂にかかる官職をさえ心佳からずとして、三十二才辞職、東京下町墨田川堤に隠れ「墨士隱士伝」などを執筆したことは、やがて「花月新誌」編輯の前兆を語るものであろう。鶴亭閑人(曾我)は「號^レ花月新誌」と題し次のような時を書いている。

一番號了、一番新、月影花香儘万緒

無限、風流誰、是、主、幽栖人、占、墨陀、春

まさに、明治初期文人中の稀な一畸人であつたと云える。柳北の「探泉記遊」と題した小品中に、片仮名交りの以下のようなものもある。

「函根ノ山笠一夕夢ニ濕上子ニ告ゲテ曰ク、今ヤ暑威漸ク衰ヘ新涼郊ニ入ル、踏山温泉ノ浴客大半歸リ去リ、復タ熱官俗子ノ擾々

トシテ林懸淵愧ヲ為ス有ラズ山水方ニ幽絶吾子益ゾ一遊セザルト。瀟士子遊意動キ将ニ途ニ上ラントス。而シテ伴侶無キニ苦シム。妻児ヲ携ヘン乎奇険探討ノ累タランヲ畏ル。僑子学生ヲ伴ハシ平、勃牢理窟以テ我が興ヲ破ランヲ畏ル。歌妓舞姫ヲ誘ハシ平、陸生素ヨリ藝中ノ贊ニ乏シ、浪費ノ支フ可カラザルヲ畏ル。三畏犯ス可ラズ、佳友ヲ挾ブニ若カザル也、乃チ往テ掏翠鐸子ニ謀ル(下略)

隨筆めいた調子が隔々まで濃厚であるが、古典の中では何となく兼好のつれづれ草や、松平定信の花月草紙の系統をつくものであることがみられる。かれは「我楽多堂」に隠栖したこともあるが、それはまさに兼好隠栖がつれづれ草を書いた丘にも比較される。花月新誌には、その数は多いが、今様歌の投書なども掲載している。例えば師岡正胤作として

琴

都にとほき名はおへど、ともにゆかしきしらべなり、いにしへし
たふ筑紫琴、そのかみしのお吾妻琴

と云う一首なども見える。兼好も後白河上皇撰の今様集「采塵秘抄」を興味ふかく読んだらしい。(十四段、但し郢曲という)要するに、花月新誌は、過渡期に編輯された一隨筆雜誌に過ぎないけれど、編者柳北が殊更幅広い知識人であったことは、その編輯態度によって

証明される。なお問題を残しているもので附説したいのは柳北に探偵小説の識見があることで、これは文久元年、神田考平がオランダ語から最初に訳した「和蘭美政録」と題し出版したものを利用し、いわばわが探偵小説の先駆らしく、柳北が「揚牙兒奇獄」と改題し、原書からの訳文でなく咄の筋の概要を伝えた一篇である。蘭外の作「雁」の中でも次のように述べている。

僕も花月新誌の愛読者であったから記憶している。西洋小説の訳訳というものは、あの雑誌が始めて出したのである。何でも西洋の或る大学の学生が帰省する途中で殺される話でそれを談話体に訳した人は神田考平さんであったと思ふ。それが僕の西洋小説と云ふものを読んだ始であったようだ。

明治七年、柳北は朝野新聞の記者として懇請された。その「雑録」欄に才筆を振ったもので、東西を問わず、新味あるものには直ちに手を出すことに躊躇しなかった。朝野新聞はその「雑録」欄に載せられた洒脱滑稽機智を混じた筆により直ちに新聞の購読者の増加を見せ、東都五大新聞の一に加えられるに到ったと云う。前記した近代文学研究叢書によれば、次の解説引用が掲げられている。

彼の筆致は飄々高逸奇想百出して真に端記すべからざるものがあり、一読して忽ち泣き忽ち笑ひ筆端神あるにあらざるやを訝からしむるばかりで、しかも世を規し俗を諷するに遺漏あるなく、真

に天下の奇文と称すべきものであった。されば人皆彼の「姪録」を讀まんが爲に争つて「朝野新聞」を購求するに至り、短日月にして一躍一流新聞に列し、彼の文名忽ち海内に喧伝され、面会を請ふもの、詩を需むるもの日夜門前に市をなし、到底その需めに應ずるえざるに至つた。彼大に困じ潤筆料を紙上に掲載し、戯れに潤筆料を定めたが、なほ防ぎ能はず、遂に「澤上漁夫死す」の戯文を掲載するに至つた云々

かつての幕府の重臣が、一新聞記者となり、意外の人氣を集めえた次第がこれで彷彿されよう。徳はもとよりとして、むしろ文才の魅力に因るものと云うべきだろう。

本論では、柳北の伝記や人間味やを深く考察する余白がなかったが、花月新誌の一部を紹介するにあたり、結言として、時代の變遷過渡期と文学との關係交渉の一般を顧ておきたい。先ず、奈良七代が終り、長岡や京都に転都され平安時代（中古時代）の起こされた當時を考えると、和歌は万葉仮名、伝説類は漢文崩の文体を用いるに過ぎなかつたけれど、平城・嵯峨・淳和帝時代の大陸文学輸入の熱意は、極めて甚しいものであった。不幸にして、現存している漢詩集の類は少なく貴族公家族の一部に限られたように見えるけれど、おそらく民間にもこれに追隨したものが相当にあつたらしく考察される。たとえ、それらが唐詩の模倣であっても、個性表現の熱

意は、民族としての心のあせりがあつたわけである。次に、中古時代から中世への過渡期であるが、公家の勢力が武家に移行したように、従来の宮廷中心の文芸は影をひそめて、細流乃至卑官の文人が、軍記物・今昔物語その他、方丈記を書いて世に問うという状態のものとなつた。方丈記の作者さえ、はたして鴨長明であるか否かが問題となつてゐるように、保元平治物語、承久記等、筆者が明らかでない。筆者匿名ということとは、却てこうした時代變遷期の作者の特異さを語るもので、所詮、畸人めいたものが多かつたことが判る。他方、源氏物語の文体を追慕するものがあつても、執筆者の心用意と云うものが、からりと変り、古今著聞集類の説話物、つれづれ草類の随筆物、すべてその享多者読者を広い視野に収めてゐる。中古時代から近世への変化も同様である。文学の様式では最も因習的とされた和歌文学にさえ反二条運動が現われ、(戸田茂膳その他)連歌は談林俳諧などを生み出し、中世歌謡は古浄瑠璃、女歌舞伎の出現を導いた。すべて近世初期から元禄時代にかけて人心の変化を概観するも多種多様である。まさに町人時代文学というに俾らない。

さて近世末期から明治への変化であるが、近世後期には回顧的思想なども出て、とかく、封建時代の保守因習に偏する半面もあつたが、西洋文学が波浪のように没入してくる実状に対し如何ようによす

ることも出来なかつた。独り柳北あつただけでなく、ひとり「花月新誌」の創刊されただけでないけれど、すでに考察したように明治初期の現象としては、異数の中の一例である。花月は、日本人自然観の一大象徴である。その花月をたっぷり背負いながら、目もあやな前進を企図したところに柳北独自の面目がある。かれは隠士であつてまた非隠逸人であつた。